

地域医療は再生する 病院総合医の可能性とその教育・研修

松村理司 編著

＜書評者＞ 邊見公雄（社団法人 全国自治体病院協議会会長）

「地域医療は再生する」のだろうか？ この本のタイトルを見たときに、再生してほしいという当事者としての強い願望と、どんどん悪い方向に流れる現実との狭間で、少しわだかまりのようなものがあつた。それを可能にするのは総合医である、というのが著者松村理司氏の持論である。総合医を“間口を広く、かつ深い”領域と述べているが、この本もそれを地でいっている内容である。

かつて小生も、大学病院研究室から片道3時間をかけ毎週水曜日に手術応援に通っていた舞鶴市民病院での氏の総合医としてのご経験、音羽病院での院長としての御苦労がこの本のレベルを高め、広くて深いバイブル的地域医療の解説書に仕上げられている。森嶋外と高木兼寛の論争が専門医と総合医のルーツ的なものというのも目から鱗、大学と市中病院に置き換えるのも可能であろう。スキル・ミックスやメディカル・アシスタントも、米国での経験から説得力がある。50年、半世紀遅れに

なってしまうと、まだ追いつくチャンスはわずかに残っているとほかない希望も抱かせてくれる優しさもある。

小生は、女性医師の“3H”は Warm Heart, Cool Head, Skill (Good) Hand のことかと一瞬思ったが、予想外でかつ納得、参ってしまった。最も感心したのは、職員を守るためには筋を通して理不尽なクレーム・訴訟に院長が先頭に立ち門前払い。いうはやすいがなかなかできることではない。これにも私は参った、参った。この本を読んでからは先輩面ができなくなってしまった（実は、著者は小生の大学の6年後輩である）。特に61ページの遺族に対する慰謝料御免、お断りの文章は腰越状以上の名文で、院長など病院管理者の心を打つ。複写して院長室に掲げておきたい。

診断学の基本ともいえるべき診断推論や臨床推論、そのために招いた大リーガー医、またチーム医療下での屋根瓦方式教育指導、専門医志向から家庭医の重要性、病院

死から在宅死へ、そのための地域総合診療医。メディカルスクールや地域枠と医師の育成にも付言している。DPCと病院医療、わが国特有の中小病院における勤務医の実状、足利事件とDNA鑑定など、著者が四方にアンテナを高く上げているのがよくわかる。さらには、総合医の行う臨床研究、臨床疫学など同僚の若手医師も筆を奮っている。この本を読んだ院長や副院長、部長の先生方は必ずや自院の医師に短期研修、出前回診をお願いしたくなること請け合いである。

小生は卒後40余年、大学周辺で研究していた数年を除き生粋のジェネラリストと思い、またそこそこやれる院長と思っていた。しかし、この著書を読んで私の自負は木端微塵、寝苦しい夜が続いている。地域医療に自信のある方は、ぜひとも御一読を。また自信のない人も、私の故郷の阿波踊りのお囃子「よしこの」風にいえば“読まなきゃ損、損”。

●A5 頁304 2010年
定価2,940円
(本体2,800円＋税5%)
[ISBN978-4-260-01054-2]
医学書院刊